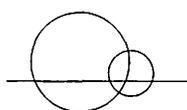


〔講演会〕



## ハルピン学院と私

ハルピン学院出身、愛大25年卒 谷 藤助

【司会】 引き続きまして、次はハルピン学院のご出身であります谷藤助先生であります。ハルピン学院を終戦の年に繰り上げ卒業となり、その後愛知大学に入学されました。そして昭和25年に司法試験に合格されまして、検事に任官され、最高検察庁検事、山形地方検察庁検事正などをご経験されておられます。ということで、では谷先生のほうからご講演をいただきます。よろしく願いいたします。

【谷】 ご紹介にあずかりました谷でございます。ちょっと足が悪いので座らせていただきます。私に与えられた話は「ハルピン学院と私」という題名でございます。私はハルピン学院という学校の最後の卒業生でして、そのためにこれからハルピン学院という学校について何かお話をさせていただきたいと思っております。ハルピン学院という学校についてはあまり日本で知られていないと思っておりますけれども、この学校は今の中国のハルピン市というところに創立され、そこで勉強をしたのであります。ハルピン学院というのは1920（大正9）年、ハルピン市に初めて創立された満州国立の大学でございます。当時はまだ満州国ができておりませんでしたから、このハルピン学院は日本の外務省が監督した、日本で言えば当時の旧制の高等専門学校に相当する高等教育機関でございました。

### 1. 創立の経緯

どうして大正9年という年にこのハルピン学院が創立されたかと言いますと、皆様に配布されている講演メモ、これを見ていただければその当時のことの概要が分かるかと思っております。まず年表を見ていただきますと、1914（大正3）年に第1次世界大戦が勃発。それから1917（大正6）年にロシア革命が起こってロシアが崩壊する。1918（大正7）年に日本はシベリア出兵をする。こういうようなロシアの事情がございました。当時満州に南満州鉄道（満鉄）という鉄道会社がございます。その職員で井田孝平という方が南満州鉄道から派遣生としてロシアに派遣されておったのでございます。そしてこの井田孝平という方と前後して、もう1人満鉄の理事（重役のような役職です）を務めておった川上俊彦という、後に日本の在ポーランド公使、日露漁業株式会社社長などを歴任された方、この2人の方がちょうど1917年のロシア革命の頃に、視察中のロシアのボルガ河の船中でいろいろと話をされた。井田孝平という方がどうしてもこれからの日本は、ロシアとのあいだの交易と言いますかいろいろな関係で、おそらく日本と深い関係を持つんじゃないかと。ならばロシア語のできる有為な人材を養成する必要があるのではないかと、そういう構想を立てて川上さんに話をされ、了承を受けた。この井田さんが実は最初のハルピン学院の校長になられるんです



けども、この方が努力され、そして今お話ししたように大正9年の9月24日（創立記念日としています）にハルピン学院が開校したわけです。初めこのハルピン学院をどこに建てるかということがいろいろ問題になったようで、ロシアのウラジオストックに開校しようじゃないかという説もあったらしいですけども、最終的には中国領であり当時はロシアの勢力下にあったハルピンがいいんじゃないかということで、そこにできたわけでございます。

その当時の資料によりますと、設立の主体は日露協会という、日本にあります法人で、この協会の会頭の後藤新平という方は東京の市長その他、満鉄の総裁などもやられた方ですが、この協会が言わば主体となってできあがったんです。そのために学校の最初の名前は日露協会学校で、1920年に創立されました。当時の記録によりますと、日本の政府から25万円（その当時では相当な大金らしいです）、そして満鉄から5万円、合計30万円の資金を受けてこの学校が建ったということになっております。学校の敷地は、当時ロシアが支配しておりました東清鉄道というシベリアに通ずる鉄道の用地を7千坪もらって第1期のハルピン学院の校舎ができ、いよいよ設立をしたという歴史がございます。これがわれわれのハルピン学院の歴史の一番初めということになっております。

## 2. 校名の変遷

この学校の校名を、一応ハルピン学院とわれわれは通称で言っておりますけれども、今申しましたように最初は日露協会学校という名前で、その当時のいろいろな事情から2回ほど名前が変わっております。大正9年にできた当時は日露協会が建てた学校ですから日露協会学校という名前です。昭和7年満州に満州国という国ができあがって、その翌年にハルピン学院という名前にしたのはつまり、満州国ができたために、日露（ロシア）

というんじゃないしに満州でも活躍できる人材を養成しようじゃないかというような話が起って変わったようでございます。そしてその後、言わば幻の満州国ではありましたが満州国が一応の発展を遂げたため、昭和14年に日本の外務省から分かれて独立した満州国の国立大学という形で、満州国文教部（文部省）の管轄下に置かれるようになって、その後終戦の昭和20年まで、満州国立大学ハルピン学院という名前でわれわれの大学が存続しました。こういう経緯をたどっておりまして、私自身は昭和18年の4月に入学して昭和20年8月に終戦を迎え、ハルピン学院が廃校と言いますか終了する時に繰り上げ卒業ということになりますけれども、最後の卒業生という形で名簿の上に載っておるわけでございます。

今お話ししたように、初代の校長がこの学校を設立した井田孝平という方でございますけれども、ハルピン学院というのはわずか25年、四半世紀の命しか持つことができませんでした。この25年のあいだに校長は初代の井田孝平から第7代の渋谷三郎まで。渋谷三郎という方は2・26事件の時の麻布の連隊長をしておられた方で、まあ2・26事件が起こった時には、まだ赴任をされて間もなくで当日は公務出張中で在隊しておられなかったとかいうような話もございますが、その責任を取って日本の陸軍を退官され、満州国に移られたというような経歴のある方です。非常に人格のある謹厳な院長で、終戦の時、ハルピン学院が廃校になると同時に一家全員自決をされ責任を取られたということで、われわれ学院生のあいだでは非常に慕われた方でございます。

## 3. 学校の内容

ちょっと余談になりましたけれども、日露協会学校というのはいったいどんな性格の学校であったかと言いますと、第1期の生徒は50名を募集しており、非常に小さなこぢんまりとした、言わば塾的な学校ではないかと思えます。50名のほ

とんどが都道府県の県費生と言いまして、各県がそれぞれ学費を出してその県下の中学校の生徒を募集し、採用試験をしてハルピン学院に派遣するという制度をとっていました。ほとんどの府県がそういう制度をとっていたため、各県1名ずつ採用してもそれで50名が埋まるというような形で、あとは満鉄その他の企業から試験に受かって合格した公費生です。ですからいわゆる私費で行くというのはほとんど無かったようで、県費生、公費生が全国からせいぜい1、2名ずつ集まってきた学校という歴史になっております。

理想としてはソ連（今のロシア）との貿易、その他国交のために役立つ人間を養おうということだったんですが、ロシアとの国交はいわゆるシベリア出兵以降ほとんど途絶し、ソビエト連邦ができてしまったものですから、貿易をすることも卒業生はどこにも就職することができなかつた。非常に苦勞をして、しかも学校としてもそのためにストライキが頻発したり、学生もせっかく全国から選ばれてきたのに、ろくに就職もできないようじゃどうしようもないという時代が続いて、その後ハルピン学院の入学生は50名から30名に減ったというような受難の時代がしばらく続いたようです。

ところが満州国ができたり、戦争が始まって景気がよくなったというような関係もあるんでしょうか、やっとな満州国の中での就職その他もできるようになって、学校の定員も60名になり、最後の頃、昭和14年からは100名というように、まあ発展（と言っていいんでしょうか）をするようになって、府県費生以外にも私費生という形で、自分で学費を出すならば来いと。ところが実際には私費生と言っても、満州国の国立大学というのはどこの大学もほとんど同じようだったんですけども、ハルピン学院で申しますと一切の費用、教科書それから学費、全て無料でした。ですから私費生と言っても小遣いが要るだけです。小遣いというのはその当時戦時中に配給された靴下なり石

鹸なりを中国人街へ売りに行けば、けっこうな金になって、親からの仕送りが無くても何とか学業は続けられる。しかも府県費生とか会社からの委託生は、小学校の教員の初任給と同じぐらいの月給が毎月支給されるものですから、けっこうみんな優雅な学生生活を送ることができたわけです。

では何をいったいこのハルピン学院という学校は教えていたかと言いますと、これはもうロシア語専門でした。ロシア語はものすごく厳格で、しかもたつぷりと充実した時間を当てられて、私達の時代で言いますと、1週間のうちの午前中は全部ロシア語でした。しかも100名募集された生徒の中から20名単位でまたクラスを分けられ、小さな教室に20名が入れられて、午前中は半分の時間を専任のロシア人の講師が付いてロシア語の会話をわれわれに教える。このロシア人は皆日本語は知らないか、知らないふりをしている。出席をとって名前を言われても発言がロシア語で読むので果たして自分がその名前なのかどうかよく分からなくて、欠席にされたりしたこともありすし、授業中ペラペラペラペラとロシア語だけをしゃべって、1人1人に当てるものですから、否でも応でもロシア語を皆学ばざるを得ないような授業を受けさせられました。あとのほうはロシア人じゃなしに日本人の先生が、文法を1年間、これも徹底的に教えられる。文字を教えられるんじゃなしに、文字は勝手に習ってこいという形で、最初から文法を徹底的に教えられる。午前中はそれだけで終わってしまう。こういうような授業をさせられたわけです。

午後は言わば今の日本の大学で教えられる経済だとか、法律だとか、そういうような関係の学科が主で、その他と言えどソビエト憲法、東亜資源論だとか、いろいろな講義がありましたし、そしてまあ戦時中ですから、教練もけっこうあって、そういうようなものに午後の授業が費やされておったというのが実情でございます。徹底的にロシア語は教えられるんですけども、教室で教えら



れた語学というものは人によってはすごく上達する連中と、全然勉強しない連中とありますが、いったん教室の外へ出ると、非常にロシア人の多い町ですから、どこの飲食店に行ってもきれいなロシア娘がいるし、よく夏になると冬服を、冬になると夏服を質入れしたりする、質屋もロシア人の経営だし、ロシア人経営のレストランその他も多かったものですから、そこら辺へ行くと学校で習うよりもけっこうロシア語が上達する。学校の成績の悪い連中でも半年ぐらい、だいたいは1学期を過ぎると何となく日常生活でのロシア語には困らないという状態になるような町であり、教育であったように思います。

卒業生は非常に少ないんです。終戦の時私達は3年生でしたけども、1年生2年生もまあ卒業生に加えて、25年の歴史の中で、卒業生は1,412名ということにわれわれのあいだではなっております。今のマンモス大学に比べると1学年の定員よりもはるかに少ない人数の学生が、25年間かかって卒業しているというような、全く塾のような小さな大学でした。教授その他教職員はそれでもだいたい40名から50名おまして、日本人の先生が約半数。一般教科とロシア語の教授、助教授、講師です。それからロシア人の講師が20名ぐらいおりました。第1外語はロシア語が必須科目でした。第2外語は中国語かモンゴル語(蒙古語)を専修するように義務づけられていたので、中国人の先生と蒙古人の先生が数名いて、教員は50名ぐらい。その他事務職員が10名ぐらいという、これもこぢんまりとした規模の学校でした。本来ハルピンは中国人の町ですから、中国語を第2外語にとれば、ロシア語の他に中国語も町でしょっちゅう使いますから、中国語で日常生活に困るといようなことはなかったようです。私は蒙古語を専修したんですが、中国語はハルピン学院に入学する前に、戦時中で第2外語として中学校で習っただけですけども、やはり中国のハルピンにいろいろなしゃべれば、それほど中国語で

日常生活に不自由するということはなかったように思っております。

学校の生活ですが、全寮主義をとっておりました。1年生と2年生は北寮という1つの寮に入り、1年間そこでびっしりと教育をされたわけです。3年生4年生は別の寮で暮らしておりました。上級生の3年生4年生になると、希望者だけですけども町のロシア人の家に下宿することになっておりました。これは私は経験がないんですが、先輩達のお話ですと、ロシア人の家の1部屋を借りて、お茶付きで月いくらと。食事は全部学校の寮でするわけですけど。そこで言わば日常のロシア人との交流を深め、さらにロシア語を磨くと言いますか。学校の方針として最上級生はロシア人の家に下宿するという方針をとっておったようです。

公表された統計によりますと、1942(昭和17)年当時のハルピンの人口は73万人です。現在の中国では周囲を含めると1千万人を超えると言われてはいるようですが、当時は73万人。いわゆる本来の満州人というのはもうほとんどおりませんでした。ですから中国人、いわゆる蒙古人も含む満州国人です。73万人のうちの62万人が満人で占められておりました。ほとんどがやはり中国人です。そして日本人。朝鮮もその当時日本の領土でしたから朝鮮の方を含んで日本人は7万人。そしてロシア人は約4万人。1917年の革命でソビエト軍に追われたいわゆる帝政ロシアの貴族その他が亡命してきたということになって、そういう連中を白系とわれわれは呼んでいましたが、4万人のうち白系ロシア人が3万人、ソ連系(赤系)ロシア人が1万人、合計4万人のロシア人がハルピンに住んでおりました。満州国にロシア人がだいたい7万人ぐらいいたんじゃないかと言われますから、過半数のロシア人がハルピンに住んでいたのではないかと思います。

講演メモの下のほうに地図と統計がございますが、プリントのミスがあるので訂正させていただきます。

きます。「1970年（昭和14年）」とございますのは「1939年」の誤りでございます。1939年の統計によりますと、日本の面積は68万km<sup>2</sup>となっております。これは朝鮮、台湾、そして北方領土の樺太等を含めた当時の総面積で、今は37万km<sup>2</sup>とこの半分となっております。これが日本だというように言われておりました。そして総人口は9,800万人ということになっておりました。われわれが小学校の頃に教科書で習った人口は8,000万人でしたが、昭和14年当時は朝鮮の方、台湾の方を一切含めて9,800万人と。現在の人口は日本人だけで1億2千万人とか言いますから、だいぶ変わっております。それに対して満州国は130万km<sup>2</sup>。その当時の日本から比べても約2倍の面積を持っておりました。そして人口がわずか3,500万人ということですから、当時の国策として満蒙開拓という、皆満州へ行け、蒙古へ行けというような国策が喧伝されたわけでございます。

日本での学生生活は確かに昭和18年から19年にかけては非常に厳しいものになっておりました。配給制度も徹底されるようになり窮屈な感じを受けるようになってきましたけれども、それがハルピンへ行くと一転して、まだこんないい思いのできる場所があったのかと。私は甘党なんです。餛飩がそれこそ食い放題だったのですから、学校が終わると餛飩屋へ行って、餛飩を一箱（10個入り）1円10銭で買っては頬ばり、ああいいところへやってきた、こんないいところならもう日本へ帰りたくないと思ったものです。統制は徐々に厳しくはなってきたんでしょうけれども、私達学生にとっては、日本に比べるとはるかに天国だなあ、ハルピンの生活はこんなにいいのか、と当時は感じられました。

#### 4. 終戦の前後

ところが昭和20年8月という時が来ると、まさに天国が地獄に一変する思いにさせられたわけでございます。ハルピン学院もこの昭和20年8

月に閉校になるわけですが、満州国自体が昭和20年5月、これは日本も全部同じなんです。徴兵年齢が20歳から19歳と1年下げられてしまいました。われわれ3年生は全員これに引っかかってしまって、昭和20年5月に根こそぎ動員を受け、ほぼ全員の学生が兵隊に取られることになったわけです。そして2年生の一部年上の連中も取られてしまったものですから、残るのは1年生。1年生は日本から満州まで渡るのがもうその当時、昭和20年終戦の年ですから四苦八苦の思いで、ほんとうに何か苦勞を重ねて来た連中ばかりだったらしいです。その1年生、これが一番われわれから考えると悲惨だと思います。昭和20年4月の入学期に間に合わない連中が多かったようですけれども、4月5月6月頃までのあいだに苦勞してやっと何とかハルピンまでやって来たと思っただろう、いわゆる動員を受けて勤勞奉仕、そして8月終戦。いったい何のためにハルピンに勉強に来たのかという悲惨な運命を、1年生の連中は受けました。

どこの大学でも同じだと思いますが、昭和20年5月をもって大学の機能というのはほとんどなくなっていました。学生もそうですし、教職員も根こそぎ動員を受けた。大学の機能というのは有って無いような形になってしまったわけです。そしてすぐ8月の終戦を迎えることになり、学校では、私は兵隊に行っていてよく知りませんが、8月15日の終戦と共に院長が全学生を集めて訓示をされ、校旗を燃やし、中国人、蒙古人の学生にはそれぞれ旅費を院長手ずから渡し解散をされ、学校の整理をして、翌日家族で自刃をされたという話を聞いております。その時やはり、副校長に当たる白井という学監、早稲田を出られていて非常に国粋主義的な方でしたけれども、学校の寮の3階で家族（子沢山な方でした）を連れて全員が自害をして亡くなったという、ハルピン学院にとって悲惨な歴史のうちにこの学校は終わってしまったわけでございます。



その後ハルピン学院がどうなったかということなんですけれども、実はこのハルピン学院という学校は、日本からもソ連（ロシア）からも、各々スパイ学校という非難を受け、評価をされておりました。これはわれわれのハルピン学院の創立の目的とは全く外れていたと思いますが、そういうような非難の中で、帰ってきた同窓生は非常に苦勞をされたようでございます。シベリアに抑留された連中は、おそらく日本の大学では第1位ではないかと思えます。卒業生1,412名（と言っても実は中国その他で満州にいなかった人や既に死亡した人もおりますからまあ1,000人ぐらいになりましょう）のうち、238人がソ連に抑留されております。卒業生の6人に1人がソ連の捕虜になって長い抑留生活を続けました。そのうちでも抑留率1位はわれわれ24期生で、120名中31名、言わば4人に1人がソ連に抑留されました。私も同じように、5月に召集されて8月にソ連の捕虜となり、ずっと通訳をさせられ、どうやらこうやら日本にたどり着いたと、こういうような状態でございます。

現在ハルピン学院の名を残しているのは、東京の上智大学にあるハルピン学院顕彰基金というもので、毎年上智大学ロシア語学科の学生に、ハルピン学院からということで奨学金を渡していること。それからもう1つは、東京の高尾霊園に立派な学院の記念碑を立てまして、記念碑祭を毎年4月に催し、その記念碑の中に学院の亡くなった人の遺骨や遺品などを毎年収容しており、いつまでも長く仲間を手をつないであの世まで行こうやというような形で残しております。

現在その遺族を含めて、学院の記念碑祭には150名前後の方に来ていただき、遺品の収納、校歌の斉唱とか、会食とかいうものを作って、せめてもハルピン学院というものを偲んでおるといような状況でございます。現在ハルピン学院の卒業生で残っておるのは197名というように言われております。いずれも84歳が最後で、これも

いつか近い将来無くなるんじゃないかと思えます。こういう大学で学んだことは非常に珍しいかも分かりませんが、われわれは今でも学院の連中と付き合いをし、昔の思い出をよすがに生きております。こういう学校でございます。以上をもって終わらせていただきます。

**【司会】** 谷先生どうもありがとうございました。何か内容に関しましてご質問等ございましたら。はいどうぞ。

**【参加者】** 私も交換教授としてしばらくやらしていただきました。話を聞いたところでは、ハルピン工科大学は非常に有名で、また優秀な学生がおられました。ハルピンからわざわざ瀋陽までよく来ていただきました。非常に懐かしい思い出です。私が想像していたのでは、ハルピン学院というのは「五族協和」を掲げてましたから、中国人も蒙古人も朝鮮族も満族も日本人も、皆いたかと思いましたが、お話を聞くと学生は全部日本人だったと。それがもうびっくりなんです。それで当時このハルピン学院というのは、ハルピンでどのような評価を。いい学校だと思われましたか、それともあいつらスパイだというふうな目で見られてたのか。どんなふうに市民のあいだで見られてたのか、ちょっとそこを教えていただきたいと思えます。

**【谷】** 満州国立になってから、学生の1割は満州国人を入れるということになっておりますので、その後はわずか6年間ですけども、中国人、蒙古人、朝鮮人、そういう方が1割入ってきております。それから評価でございますけども、これはまあ私は内部の人間ですから、外部でどう評価されておるかということについては正確なことが言えるかどうか分かりませんが、言わば満州国の最高学府の1つ、しかもハルピンでは文科系としては唯一の大学でしたから、そんなにスパイ養成

所だというようなことはないんじゃないかと思  
いますけども。

【参加者】 戦後の1つの風潮だとは思いますが  
れども。

【谷】 はい。

【参加者】 貴重なお話ありがとうございました。

【司会】 あとございますでしょうか。先ほど「五  
族協和」と言われたのは建国大学のほうですね。  
あとよろしいでしょうか。どうもありがとうござ  
いました。それではここで10分ほど休憩をさせ  
ていただきます。

講演メモ                      哈爾濱学院と私                      谷 藤 助

1 沿革

    創立 1920年(大正9年) 9月24日 日露協会学校

    校名の変更 1937年(昭和8年 大同2年) 哈爾濱学院  
                1939年(昭和14年 康德6年) 国立大学哈爾濱学院

2 学校制度

    入学定員 1学年 50名から100名

    授業科目 ロシア語中心

    学生生活 国際都市として映画 演劇など自由

3 終戦時と現況

    ソ連抑留者 卒業生1412名中238名

    哈爾濱学院記念碑 毎年 慰霊祭 開催

---



ソ連	1940年(昭和14年)	
黒河	ブラゴエ	39
日本	68万平方軒	9千8百万人
満州	130万平方軒	3千5百万人

---

1914年(大正3年)	第1次世界大戦勃発
1917年(大正6年)	ロシア革命 帝政崩壊
1918年(大正7年)	シベリア出兵
1932年(昭和7年)	満州国建国